

辞書ではよくわからない英語の語句と用法

——その6:「“yes”で答えるか“no”で答えるか——

藤 本 規 夫

英語を習い始めた日本人を大いに混乱させることの一つに“yes”・“no”と「はい」・「いいえ」の使い方の違いがある。確かに厄介な用法の違いなのだが、大学生になってもしっかりと身につけていないことが多くて教える方が戸惑うことになる。本稿では、日本語と英語の発想と用法の違いについての一般原則を復習するとともに、日本語でも英語でもその原則に収まりきれない例が存在することを検証する。

1. 日本語と英語における肯定と否定の仕方について

まず、専門家がその違いをどのように解説しているかをみることにする。英文学者で日本語論でも多くの著作がある外山滋比古は次のように述べている^(注1)。

日本人は Yes と No がおかしい。外国人がよくそう言う。日本人はどこがどういけないのか、はっきりしないまま、おかしいのは恥ずかしい、と恐縮する。恐縮とまではいなくても、気にはなるのである。英語を使っていなくても、もともと日本人は相手のことばを頭から否定するようなことのできない、心やさしい国民なのかもしれない。対立を好まない。できれば議論をさけたいと願う。(中略)

ここで語法上の Yes と No を考えたい。Yes と No は、中学校の英語でもごく早い段階で出てくる。

Can you swim? この答えは Yes, I can. か、No, I can't. のどちらか。(中略)

問題は、問いが否定文のときにおこる。Can't you swim? 「泳げませんか」、英語の答えは肯定疑問文のときとまったく同じである。Yes, I can./No, I can't.

ところが、これをこのまま、というのは Yes を“はい”“ええ”, No を“いいえ”として訳すと、「はい、泳げます」「いいえ、泳げません」となっておかしい。「泳げませんか」に対するふつうの答えは、「いいえ、泳げます」「はい、泳げません」でなくてはいけない。(中略)

英語の Yes, No は、問いには関わりなく、答えが肯定だったら、その先ぶれとして、Yes, 否定であれば、No をつける。(中略) しいて言えば、英語の Yes, No には話者の論理と主体性がつよく出るのに対して、日本語の“はい”“いいえ”は問いとの関係、相手への配慮が優先しているように思われる。

これが一般的な説明であり、英語を話したり、書いたりする際に適用できる原則なのであるが、これですべて解決かという点、ことはそう簡単ではない。英語の用法についてこの原則から外れた例のことは後でみるが、日本語についても一般論にあてはまらないことがあるので、そちらを先に取りあげることにする。

まず、日本語と英語の用法が違うということについて、日本語の立場からの異論を「発見」したので紹介したい。これは柴田武の意見である^(注2)。

つぎに、否定疑問の例で考えてみましょう。たとえば「銀座へ行かないのですか？」と聞くとすると、イエスとノーの答え方が日本語と英語で違ってきます。日本語ではこの場合「ええ、行きません」ですが、英語ではご存知のように “No, I don't.” となる。

ところが、これをもって「日本語は、はじめから断らずにやさしく受け入れておいてからノーと断る。これは日本人のやさしさの表れである」などと、もっともらしく説く人がいるのです。

これはたいへんな誤解です。なぜなら、日本国内を見ても、九州と沖縄では英語と同じような答え方をするからです。(中略) 九州人と沖縄人は日本人のやさしさを持っていないのか。あるいは九州・沖縄の人たちと、その他の地域の日本人は心情において著しい違いがあるのか、ということになりますが、けっしてそんなことはありません。

九州・沖縄と縁のない関西出身の筆者としては、否定疑問文に対する答えが英語と日本語で肯定・否定が逆になるという原則論に納得していたので、最近になって九州と沖縄では英語と同じであるということを知ったときには正直驚いた。そして早速、数人の九州出身の学生に確認を試みたが、すっきりした結論は得られないままに終わった。現代的な若者が共通語に慣れているためか、あるいは改まって聞かれると意識し過ぎてどう答えていいかわからなくなるのか、同じ質問でも人によって答えが違ったり、混乱してあいまいになってしまったこともあった。これについては今後の宿題として残すことにする。

日本語（共通語）の肯定・否定の答え方がさらに複雑な例があることもわかった。これらの例は無意識に使っているのだから指摘を受けるまで気がつかないことが多いと思われる^(注3, 4)。

2. 英語の用法で原則から外れた例について

さて、英語の用法に移ることにしたいが、こちらの否定疑問に対する答えも原則通りにはいかない例を高橋潔と飛田茂雄が挙げているのを見つけた。

ところが、日本人の英語と同じことを英米人もやっている例が実際にはある。

3) ‘You’ll not be going away today then?’ — He sprang up abruptly. ‘No, no. I have to go.’ (Agatha Christie: *The A.B.C. Murders*)

(「それじゃ、あなたは今日はおでかけになりませんか」「いや、行きます。行かなくちゃ」と彼は急に立ち上がった)

4) ‘You don’t know anything,’ he said, ... — ‘Oh, no,’ Rose protested. ‘I know a lot.’ (Gram Greene: *Brighton Rock*)

(「あなたは何もご存知ない」と彼が言った。「いいえ、とんでもありません。私はよく知っています」とローズが言った)

これらはいずれも、「否定の質問には内容上肯定なら Yes で、否定なら No で答える」とは言えないケースである^(注5)。

学校では、たとえば Don’t you have money? (「お金もってないの」) とたずねられたとき、「いいえ、少しは持っていますよ」と答えたければ、日本語では「いいえ」であっても Yes, I have some. というように答えるように教えられている。もし You have no money with you. Right? と質問されたら、その Right に反応して、No, I’ve got some money. と答えるのが正しいが、学校ではそんなことは教えてくれない。

次の例は関西のイエズス会が出版し、関西だけでなく関東のキリスト教系の高校で長年使われているレベルの高い高校教科書のなかの一節である。(中略)

A: I intended to have made some clothes for the children, but then decided against it.

N: Why? Weren't they satisfied with the design?

A: No. They were pleased with the design, too.

(「子供たちの服を作ろうと思ったけど、結局やめにしました」「どうして。お子さん方、デザインに不満だったんですか」「いいえ。あの子たちもデザインは大好きだといってたわ」)(中略)

これを読んで、(私が下線を施した) No. は誤りで、ほんとうは Yes. にすべきではないか、という疑問を抱く方は少なくないと思う。そこでネイティブスピーカーの先生方に意見をうかがったところ、(中略) 全体を整理してみると、A は相手が想像する理由「あなたのお子さんはデザインが気に入らなかったんでしょう」に反対し、「いえ、そんな理由じゃありませんよ」という意味で No. と答えた、というのが多数意見であった。質問の表面ではなく、実質的な内容に対してイエスかノーかを答えることもあるというわけだ^(注6)。

次に筆者が集めた例の中からいくつかを紹介したい。映画から拾ったものが3例とニューヨークタイムズ紙の記事が1例ある(下線は筆者)。

1) 高校の食堂で男子生徒が女子の描いた絵をほめている場面。

Male Student: "This is so cute. You're really good at it." (「この絵がかわいいね。君はほんとうに絵がうまいんだね」)

Tai: "No." (「うんう〜ん」)

Male Student: "No, really. You are." (「いや、ほんとうだよ。うまいよ」)

(映画 *Clueless* 『クルーレス』)

この場合、女子生徒タイの No. は、No, I'm not good. と続くという含意があって原則通りだが、男子生徒の No, really. は、相手の言っていること(あるいは言いたいこと)を否定するための No. と考えられる。したがって、「英語の Yes, No は、問いには関わりなく、答えが肯定だったら、その先ぶれとして、Yes, 否定であれば、No をつける」という原則から外れている。

2) 浮気相手が来たので子供を追い出そうとしている場面。

Mrs. Carver: "Boys. Go on outside." (「みんな、外へ出なさい」)

Children: "We don't want to." "Yeah, we don't want to." (「出たくないよ」)(「そうだよ、出るのいやだ」)

Mrs. Carver: "Go play." (「外で遊びなさい」)

Children: "All right." (「は〜い」)

(映画 *What's Eating Gilbert Grape* 『ギルバート・グレイブ』)

子どもたちの誰かが、We don't want to. と叫んだのに呼応して別の子供が Yeah, we don't want to. と言っている。この Yeah は原則では No. となるはずのところだが、相手の意見に賛意を表するために肯定語を使ったと考えられる。

3) 友達のテルマと一緒に逃避行中のルイーズに会いに、彼女のボーイフレンドのジミーが尋ねて来る場面。

Jimmy: "I think maybe you don't love me anymore."

Louise: "No. I do love you..."

(映画 *Thelma & Louise* 『テルマ & ルイーズ』)

ジミーが You don't love me. と言ったのに対するルイーズの答えは、Yes, I love you. か No, I don't. となるのが原則であるが、ここでは答えが No. で始まり、I do love you. と肯定文になっている。この場合は、相手の言ったことに異議を唱えるために No. と言ったと解釈できる。

4) 2006年11月23日付ニューヨークタイムズ紙(電子版)の No School, and the Child Chooses What to Learn というタイトルの記事である。アメリカにおいて学校制度や規則を嫌う親が自宅で子どもを教育するホームスクーリングが盛んであるが、その中でも極端に子どもの自主性を尊重したやりかたを“unschooling”という新語を使って表現し、それを実践している親の発言として次の引用がでている。

“Sometimes people take it personally, like, ‘Oh, school’s not good enough for you?’” she said. “No, no. It’s just that this is what works for our family.”

(「時々、非難めいた口調で『やっぱり、学校はよくないですか』というような質問をする人がいるんですが、『いいえ、そういうことじゃなくて、このやりかたが私たちの家族に合っているって事だけです』と答えます」)

この例では、Oh, school's not good enough for you? という否定疑問だから、原則に従った答えは、Yes, it's good enough for us. か、No, it's not good enough for us. になるはずである。とすると、引用文の答えが、No, no. で始まっているから、No, no. It's not good enough for us. と続けると、その後の It's just that this is what works for our family. と意味的につながらない。従って、この例の No, no. は、気持ちとしては、No, no. It's not that school's not good enough for us. (「いいえ、学校がよくないということじゃないんです」)と、まず言った後で、It's just that this is what works for our family. (「このやりかたが私たちの家族に合っているって事だけです」)と続くと理解すればわかりやすい。結果的には肯定の答えを出すにも拘わらず、否定の No, no. を使うのはそういう意味だと解釈できる。

お わ り に

「英語の Yes, No は、問いには関わりなく、答えが肯定だったら、その先ぶれとして、Yes, 否定であれば、No をつける」という英語の用法上の原則があることは間違いないとしても、その原則に当てはまらない例、つまり、日本語(共通語)と同じ用法も決して少なくないことも事実である。英米の映画を注意して見てみると、そういう例にたくさん出くわす。

しかし、こうした例を英語学習者に教える場合には、原則をきちんとマスターさせた上でないと、返って混乱を深めることになるかもしれない。

注

1. 外山滋比古『英語の発想・日本語の発想』日本放送出版協会、1992年、P. 18-21
2. 柴田 武『ホンモノの敬語』角川書店、2004年、P. 66-67
3. 水谷 修『日本語の生態』創拓社、1979年、P. 192-193

会社のお茶の時間に、女子社員が男性の同僚の席の近くのテーブルにチョコレートの入った菓子皿を置いて、ポットを取りに出て行った。帰ってきて菓子皿を見ると、何か不審に思ったらしく、同僚の方を向いて、冗談めかして、

「○○さん、これ、食べませんでしたか」

と尋ねた。同僚はびっくりした顔をして、急いで、

「いいえ、食べませんでしたよ」

と答えた。

日本語では、質問が肯定形でも否定形でも、相手に同意する時は「はい」「ええ」と答える、とい

うことは事実であるが、最も重大な問題は、「同意」の意味である。社会的なコミュニケーションの場では、事実にも同意する場合よりも、相手の期待や意図にそおうとする時に、「はい」と答える。従って、同じ質問でも、状況によって「はい（ええ）」と「いいえ」の使い分けが違ってくる。

上の例で、「これ食べませんでしたか」と聞いたのが、単にチョコレートを食べたかどうかを知るためであつたら、賛意を示すために「ええ」という答えが出たであろう。しかし、実際には、彼女の口調が、すすめられもしない内からチョコレートを食べてしまったのだと、疑ってかかっている調子で、質問が批判を含んでいた。それで同僚は、その疑いを否定するために「いいえ」と言ったのである。

4. 金田一春彦『日本語を反省してみませんか』角川書店、2002年、P. 96-98

一方、日本語も向こうの人にすればなかなか難しいことがある。例えば「行きませんか」「行かないんですか」——よく似た言い方だが、答え方が違う。自分が行く意志を表す場合どう答えるか。「行きませんか」と聞かれた場合には「はい」を使って「ええ、行きましょう」と言う。しかし「行かないんですか」とたずねられた場合に、「いいえ、行くんです」と答えることになっている。なぜかと言うと、「行きませんか」と聞く人は、こちらが行くと思って誘っている。つまり「行きましょう」と同じ意味をだから、「ええ、行きましょう」となるが、「行かないんですか」という方は、相手はこちらが行かないのを察して聞いている。そう解釈するから「いいえ、行くんです」と答えなければならない。

5. 高橋 潔『現代英語事情』The Japan Times, 1992年、P. 34

6. 飛田茂雄『いま生きている英語』中央公論者、1997年、P. 25-29